

日本エコレザーの6つの条件

- 1 天然皮革である
- 2 発がん性染料を使用していない
- 3 有害化学物質の検査をしている
(ホルムアルデヒド、重金属、PCP、禁止アゾ染料)
- 4 臭気が基準値以下
- 5 適切に管理された工場で作られた革
(排水、廃棄物が適正に管理された工場で製造)
- 6 染色摩擦堅ろう度が基準値以上

※染色堅ろう度とは、染色された色が摩擦や使用条件にどれだけ耐えるかの指標



”国産のビッグがEUSで高評価、 エコレザー”という付加価値が後押し

出席者

藤田 晃成氏 (富田興業(株) クリエイティブディレクター部長)

吉村 圭司氏 (NPO法人日本皮革技術協会 副理事長)

純白のビッグスキンが、
グッチのバッグに採用された

吉村 本日は皮革卸の富田興業(株)の藤田晃成(あきなり)部長に出席していただきました。

富田興業さんは、東京レザーフェアで毎回斬新なブースづくりで注目を集めています。6月の東京レザーフェアでは、革をテーマ別に編集し、ブース入口に「日本エコレザー」の認定革にメッセージボードをつけてアピールされていました。この企画を実施した経緯や考えからお聞かせください。

藤田 日本エコレザー基準認証制度(JES=Japan Ecoleather Standards)がスタートしたのは2009年でした。環境対応は、われわれ皮革業界も

無視できない課題であり、皮革卸としてこの制度に積極的にかかわりたいと考えました。同時に、それは新たなビジネスチャンスにもなる、と。

革は本来、食肉加工で派生する副産物ですが、それだけでエコという考えがあるのですが、当社はさらに進めて、有害化学物質を出さない革づくりに真剣に取り組んでいます。このような先進的な取り組みも情報を発信していかないと、消費者には理解されないということ、5年前からエコレザーに取り組んでいます。

吉村 JESでは革の種類に規制はありませんが、東京レザーフェアでは「ジャンピン」という品名の豚革を展示されていました。その理由はどんなことからでしょうか？

藤田 「ジャンピン」は、ジャン、ビッグ、そしてジャンプを掛け合わせた名称です。どうせ取り組むなら、地域の東京・墨田で産出される豚革を世界に発信していきたいと考えました。日本エコレザーに認証された素材であれば、さらに魅力が増します。墨田のタンナーさんにご協力いただき、製作しました。

しかし、国内のマーケットでは豚革は裏材などで使われることが多いために、革自体への評価がもともと高くないのです。エコレザーとして、受け入れてくれる得意先は、ほとんどありませんでした。

一方、海外の革の展示会では日本の豚革の評価は高いのです。豚のエコレザーなら興味を持たれるのではないかと考え、海外で受けそうな鮮やかな色



富田興業シュールームにて



藤田晃成氏



東京レザーフェアの富田興業のブース

をそろえ、英語とイタリア語のパンフレットも作り、リネアペッレ見本市に出展したイタリアのパートナーのブースに置かせてもらいました。

吉村 EU市場は環境問題に厳しいので、エコレザーへの関心も高いと思いますが、反応はいかがでしたか？

藤田 グッチなど世界的なメジャーなファッションブランド数社に注目されました。その中でグッチが採用することになり、「ジャンピン」の白と茶の豚革を使ったメンズバッグが、1100ユーロの値段で売場に並びました。

反応が良く、もつと日本の豚革を使つていきたい、という声をいただきましたが、2011年3月に東日本大震災が発生し、福島原発問題の影響が懸念されて、取引は中断になったのです。

しかし、当社は企画を細々と継続し、海外で高く評価をされた日本産の豚革をアピールしました。自分たちでもその素材のバッグを見本としてつくつて展示会に出したほか、国内の雑誌企画で「ジャンピン」を使ったスニーカーをつくつてくれる浅草の靴メーカーも出てきました。いま、継続的に使つてくれているのは、エコをテーマにバッグを展開する大手メーカーさんです。

エコレザーの付加価値を知らせて新規顧客を開拓

吉村 英国のEU離脱問題もあり、ユーロに対して円高になって革の値段が上がっていると思いますが、EU市場への輸出は続いていますか？

藤田 グッチとは直接取引をしていますが、その他の販売先には、色違いの豚革をイタリアのタンナーを通して供給しています。イタリアのタンナーが「ジャンピン」を自社の技術や感性で再染色するのです。タンナーには、世界の有力ブランド企業からサンプリングの依頼がきています。

為替の問題は、スタートした直後に震災で中断した悔しさを忘れていないので、買いやすい価格に設定して太いパイプに行きたいですね。これまでは、日本の豚革の品質の高さを前面に出してきましたが、これだけではインパクトに欠けるので、いまは、エコレザーの基準もきちんと説明し、安心・安全な革であることを証明するタグを付けて売り込んでいます。イタリアからは、月産の供給量を聞いてきており、先方は本気になっています。

吉村 海外からJESが話題になれ

ば、日本皮革技術協会としてもPRになります。東京レザーフェアや、そのあつた行った個展での反応はいかがでしたか？

藤田 良かったですね。その前まではただのビッグスエードと思つていた人も、パネルをつくり、技術協会さんのパンフレットを置いて、特徴を説明したところ、多くの方に関心を持ってもらえました。同業の皮革卸さんからも取り扱いの依頼も来しました。当社だけでなく、業界としてエコレザーに関心を持つてもらえたなら、もつと広がつて行くでしょう。

6月の東京レザーフェアでは単に新製品を見せるのではなく、企画を立てて仕掛けていくことを念頭に展示しました。エコレザーの革を活用し、新規顧客の開拓を進めています。台東館に出展しているイタリアのタンナーも来てくれ、その良さを認めてくれました。日本の革にJESの基準があることは、まだ知りませんでした。EUエコ基準と比較しても、日本基準は水準が高く、世界に通用する革として自信を持つてアピールできました。

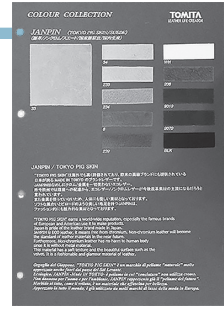
日本エコレザー認定基準は、世界に十分に通用する



吉村圭司氏



「ジャンピン」を使った
ポストンバッグとスニーカー



「ジャンピン」の3カ国語
パンフレット

吉村 EUには繊維を対象としたエコテックス100や、ドイツのSGラベルのほか、大手タンナーを監査するレザーワーキンググループというものなどもあります。日本のJESは対象を革に絞って排水・廃棄物処理の問題から、使用した薬品の審査、色落ちの基準まで設け、1枚1枚エコレザーの検査を厳密に行っているところに特徴があります。

日本ではまだ豚革に対するイメージは低いです。ヨーロッパでの評価が逆輸入されれば、日本での評価も変わってくると思います。特に豚革が評価されている点はどうな点ですか？

藤田 見えにくい部分の評価も高いと思います。グッチなどのメジャーは、世界中の革を見ており、いいモノを各地から集めてきています。例えば、当社の白の豚革について言えば、他社でも似たような革は出していると思います。白い革は、時間とともに黄変しやすいため、傾向がありますが、当社の革は黄変しにくい。ありがたいことに、彼らはこういう違いをよく見ているのです。

吉村 これは、なめし剤の違いによるものかと思いますが、日本のように、流

通が品質に厳しい目を向けている国では、これに対応するために製品メーカーもよく研究しており、色落ちなどについても研究が進んでいます。

藤田 中国のタンナーでは、自社の技術アップを図る目的で、品質に厳しい日本の要望を受け入れている工場もあります。日本の流通に苦情を言われないようなモノがつけられるようになれば、自社の財産になるという考えです。

吉村 日本エコレザーは、同じ種類の革と比べて価格が高くなるという声もありますが、その点は？

藤田 革の値段はデフレ状態から脱しつつあります。最近では原皮相場が高止まりの状態にあり、「ジャンピン」については高いとは言われません。もちろん普通の豚革と比べたら割高ですが、説明すれば理解してもらえます。その説明が大切。それがないと、その製品の付加価値も理解されず、ただ高いだけのものになってしまう。

最近大手クレジット会社が上級会員に向けたプレゼント用のノベルティをつくるために、革が必要となり、私どもに革の発注がありました。その時は、

普通の革を提供するのではなく、「JES適合の革があります」と提案しました。「付加価値の高いノベルティなら、会員に満足感を与えることができ、箔が付きそうですよ」と。そのノベルティをもらった人が、ほかにもエコレザーを使った製品はないのか、というように波及していくことも期待しています。

吉村 富田興業さんには今後も、先頭に立ってJESの革を推進して行ってもらいたいですね。日本皮革技術協会に対して何か要望はありますか？

藤田 JESは世界に通用するハードルの高い基準なので、今後は世界のスタンダードになるように、基準を維持し続けてもらいたいですね。

吉村 はい、それはもちろん。認定取得のためのコストの高さを指摘される方もいますが、認定のための検査費用には補助金制度があります。また色違いの検査項目も改訂され、取得しやすくなりました。こうしたことは日本エコレザーのホームページに分かりやすく説明してありますので、気軽にアクセスして活用して頂ければとよろしいかと思えます。